

目の発達 Jan 14th 2001

眼球の発達では、大きさ（眼軸長）が3才で23mm とほぼ大人と同じになる。視力や色覚の発達に係る網膜黄斑部は生後2～3か月で完成し、ちょうど首が据わり追視をする時期と一致する。

外眼筋は生後6か月で大人に近くなり、この時期から1才までに視力の急激な発達とともに斜視が明らかになってくる。

視力：0.02（2か月）、0.06（4か月）、0.2（1才）、0.4（2才）、0.8～1.0（3才）、6才に完成

両眼視機能：立体視 5～12か月、融像 4か月～6才

調節・輻湊 4か月～

眼位：開散眼位～正位（2か月）

眼球運動：非協調性（1か月）、180度追視（4か月）

立体視は5か月から始まり1才で完成し、融像は4か月から始まり6才までに完成する。調節・輻湊は4か月から始まり、眼位については新生児期には開散眼位をとるが2か月までに正位となる。眼球運動については新生児期では非協調性であり、180度の追視は4か月で可能となる。

#### 眼位の異常

眼位を調べるには、乳幼児が興味を示すようなキャラクターグッズなどの追視目標とペンライト1つで可能である。まず、できるだけ正面で固視目標であやしながらペンライトを正面から照らす。角膜に映る反射光が両眼とも瞳孔の中心にあれば正位であり、一眼が瞳孔中心にあり（固視眼）他眼が中心の耳側にあれば内斜視であり、鼻側にあれば外斜視である。

カバーテストは、正面に固視目標を置き一眼を覆ったとき、他眼の動きをみて斜視の有無を検出する方法である。もし鼻側から中央に動けば内斜視、耳側から中央に動けば外斜視、上・下の動きがあれば上・下視である。

カバー・アンカバーテストは斜位を検出する方法で、一眼をしばらく遮蔽した後、素早く外した時の遮蔽眼の動きをみる。鼻側から中央に動けば内斜位、耳側から中央であれば外斜視である。

#### 内斜視

乳児、1才時検診で精査依頼されるケースでよくみられるのが仮性内斜視（偽斜視）である。乳児内斜視は生後6か月未満に発症するものをいう。斜視弱視になりやすい代表的疾患であるので、できるだけ早い時期に交代固視ができるように訓練が必要であり、訓練・手術が必要な専門医への紹介が必要である。

遠視による調節性内斜視は1才ごろから発症しとくに近方視で内斜視が著明になる。発見次第眼鏡矯正を行い、眼位の改善と視力の発達を促す。両眼視機能の予後は良好である。

#### 外斜視

外斜視の90%以上は間歇性外斜視で1～2才で発症する。視機能発達は良好であり、手術の多くは就学前に行う。一方、恒常性外斜視の場合は、斜視角が大きく両眼視機能は不良である。健眼遮蔽で視力の発達を促し、交代固視ができるようになり次第手術を行う。